

でまた無くなってしまうし、何処から出て来たか分からない。

だから、戸籍というのがある訳ですよ。日本に戸籍が出来る前の事、考えてご覧なさい。まあ、侍だったら、何の何々々あるけれども、そうじゃない人は、ただ太郎兵衛、次郎兵衛だったでしょう。それじゃ、何処から名字が出て来たの？——そうですね。それを考えたら、そういうものに執着してはいけないということですよ。

一九、間違った里帰り——仏壇とお墓の亡者

お盆になると、盆踊りをする。この頃は、盆踊りはカラオケを掛けてコンクールだ。(笑) 盆踊りというのは、本当は亡者の踊りなんです。亡者が、お盆になったら、かつて自分が住んでいた処から呼んでくれるから、歓喜をして踊ってる訳ですよ、嬉しくてね——。これは靈感の強い人がいて、その姿を観たことから始まった訳ですね。それで踊っている処に、この世の人がみんなて提灯か何かを持って行く訳ですよ。

それで其々の家に、踊りながらズーツと付いて来るんですね。「よくいらっしやいました」と御馳走する訳です。

それが終わると、今度は、「お帰りにください」と提灯を付けて、またズーツと送って行く訳です。そして盆踊りの群れにズーツと入って行く訳です。

中には、あんまり御馳走するから、帰りたくないって人が出て来ますね。そうすると、家の中でガタガタ……始まる訳ですよ。

私も最初、仏壇にお化けがいるなんて思わなかったんですよ。いるんですねえ、これが……。あんな小さい処に入り込んでしまつてね。

中には、夜中になつたら、カタカタ……動きだすものもある。まあ、これはお寺だから、そうなったのかどうか知りませんが、この前、或る方の紹介で、お寺の奥さんという人から相談があったんですが、

「実は先生、家の仏壇のお位牌が動くんですが……」

「動くって、どういうふうに動くの？」

って聞いたら、その奥さんは、実は後妻さんなんです。ところが、動いているお

位牌は前の奥さんのお位牌が動いている訳です。そこのお寺さん（御住職）と奥さんが、その部屋に寝てる訳ですよ。二人が寝静まると、前の奥さんのお位牌が動きだす訳ですよ。見てる訳ですよ、もう……。」「見てるぞ、見てるぞ」って動いてるんじゃないでしょうかね。（笑）死んでも焼き餅を焼いている訳です。（笑）

「お位牌、動くの？」

「そうなんですよ、動くんです」

——これは完全に化けですね。

ですから、そこのお寺さんでは、時々夜中に戸が開く音がする。そして今度は廊下をパタパタ……スリッパを履いて歩く音がする。戸を開けて見たら、誰もいない。

しかしそういう時には、必ず次の日になったら葬式がある。もう、先にいらつしやる訳ですよ。

そうすると、これはね、お化けというのは本当にいるんですね。

しかし、お化けになってはいけませんよ。——そうですね。

この世の中には、お化けなんか一杯いる。ざらにいる。

以前或る地方で、私の話をしよつちゆう聴きにみえる方がいらつしやるんですね。

この方が、講演をした次の日に、私の滞在先に相談に訪ねてみえたんです。

そうしたら、その方の横に、頭を坊主にして着物を着たお爺さん（お化け）が一緒に来ている訳ですよ。「あれえ、この人、このお爺さんの事でみえたんじゃないかな」と、そう思ったんです。

「どうされましたか？」

「いや私はね、この前から急に腰と肩が、何か背負ったように重くてどうにもならないんですが、先生、これは一体何でしょうかねえ……」

「あなたは最近、お墓か何処か、行きませんでしたか？」

「はい、行きました」

——お盆でしたからねえ。しかもその方は、私の話を聴いてはいるけど、お寺とか、法事とか、そういう宗教的なものが好きなんです。

ところがお盆休みに、たま／＼遠くから親戚の人がお墓参りにやって来た。

早くに他の土地に移って、長い間お墓をほったらかしにしていたんですね。それで、

「家の墓は何処にあるんでしょうか」

と尋ねられたんです。しかもこの人は、土地から出た人の息子さんですから、尚更に分らない訳です。それでこの方は、親切よがしに、

「それじゃ、私も一緒に行つて探してあげますよ」

と、こうなつた訳です。ところが、昔からのお墓だつたとみえて、何処にあるか分からなかつたそうですよ。

とうとう分らずに帰つて来てしまつたんですよ。その晩からおかしくなつた。

私は、その方の横に座っている、そのお爺さん（お化け）に聞いてみた、

「あんた、誰なの？」

「わしは、○林じゃ」

そう言うんですね。それで、

「お宅、○林さんつて知つてる？」

「あゝっ！ 先生それっつ、その人のお墓を探してたんですよー」（笑）

「あなた、その人、一緒に連れて来ているよ」

「えーっ！」（笑）

——これはお化けですね。お化けというのは、何処からか、同じような心を持っている、スキがある人を探しているんですね。少し何処かで休ませて貰おうと思つてるところへ、この方がたま／＼来た訳ですよ。——こんな事、本当にあるんですよ。ですから、そんな事も知らずにお墓に行つて、「今日は、折角来たんだから、ついでにこつちもお参りして行こう」なんて、そんな事は一切やらない方がいゝですよ。亡者は沢山いるんですよ。私達は感じるか、感じないかだけなんですよ。

何時も言いますように、まあ、皆さんは姿が見えないでしょうけどもね、今ここ（会場）でも、ここ（この世）から去つた人、話を聴いていますよ。

しかしその人達、話を聴きに來ている人は、もうそろ／＼ちゃんとした処へ帰れる人なんですよ。何処に行つて話をしても、その会場にいるんですね。私は最初ね、

「これは、一体どうなつてんのかな？」つて思つていたんですよ。この世の人じゃないんですよ。まあ、その程度の人なら良い訳ですよ。

ところが、こういう話なんか、「何言つてんだ」つて話も聴かない人が沢山いる訳

ですね。そういう仲間なかまに入っちゃいけないですね。

私達は生まれて出て来た処がある訳ですよ。時間が終わったら、ちゃんとそこに帰らなければいけないですね。しかも、みんなこうやっていても、終わった後は会えなくなってしまう人もいるかもしれない。幸い会えれば良いですけど、中々会えない。

自分の方が（魂の段階だんかいはが）上の方だと思っていたら、何だか下の方したにいて、みんなが上にいた……なんてね。（笑）

そうすると、今、私達が聴いたこういう教えを、どのようにしていくかという事が大事ですね。

私は高橋信次先生という方の教えを話している訳ですけどもね。五官ごかんで捉とらえて、光ひかったとかね、何か出て来たとか、現象げんしょう化したとか、まあ、いろんな事を言う人がいますよ。そして、みんなが集あつまって、「こうしなきゃいけない」、「あゝしなきゃいけない」と言ってる人、沢山たくさんいますよ。決して、そういうものではないということですよ。そんなに難しいものじゃないですね。

私達は生まれた処がある。来た処がある。ですから、「生まれて来た」、「死んで行く」という言葉がある訳ですね。
生まれた処に帰れば良い。こんな簡単な事は無い。

ところが、みんな帰らない。真まつ暗闇くらやみの中を、みんな一いっ所懸命しよけんめい歩あるいている訳ですね。

まあ、私も話をしていてね、或る日、どっかに行っちゃったーなんてなるかも知れませんかどもね。（笑）

——次回に続く

次回『二〇、波動の周期と現象化——心が明るいか暗いか』は更新済みで直ぐにご覧頂けます。目次のページにお戻りください。